

尹 相軫

韓国出身／2019～2020 年度奨学生

日本体育大学 体育科学研究科 博士課程

富士山との縁

時は 2008 年の 12 月、初めての海外旅行先を日本に決めて飛行機に乗った。2009 年の始まりからオーストリアへの留学が決まって、留学の出発日までの待ちかねる約 10 日間をつぶすために東京への旅行を選んだのだ。初めて飛行機に乗って、何もかも新しい経験で楽しみと少しの不安を持ったまま離陸。

耳が痛くてしばらくの間苦しみで時間を過ごした自分は、今度は揺れる飛行機の中で“落ちて死んだらどうしよう”という不安で震えた。幸いに、窓側に座っていたおかげで偶然外を見たら、素晴らしい光景を目撃した。雲に囲まれてもまたその頭を堂々と見せている、ある山の姿だった。その当時はその山の名前を知らなかったが、後で分かったのが一富士山一、それがこの山との初めての出会いだった。

時間は立ち、オーストリア留学を経て、そのまま韓国に帰って 6 か月後、大学からの卒業と同時に東京への留学生活が始まった。自分の親と姉も日本という国には一度も来たことがなく、息子が留学しているうちに行ってみたいと思っていたらしく。日本に留学して 1 年、ようやく落ち着いてある程度日本語で意思疎通ができるようになったら、家族が日本に来た。新しい文化に初めて触れた 3 人は、日本旅行をとても楽しんだが、今回の日本旅行計画の一番大事なポイントは別のところにあった。一富士山登り一、それは韓国の山登りが好きな人々の間に夢のようなことで、富士山の頂上の地を踏むということは、一生忘れられない思い出になり、一生自慢話のネタとなると言っていた。親も山登り人の一人として一回は挑戦したく、しか

も息子が日本にいるということで、二度と来ないチャンスを掴んだのだ。

当日にはある地点まではバスで行って、中間地点からは足で頂上まで行こうと決めていて、夜 9 時くらいから富士山登りが始まった。最初は凄く近く見える満月を見ながら、皆散歩をする気持ちで歩いたり皆で写真を撮ったりしたが、1 時間ぐらい歩いてまったく頂上が見えないことから、私たちの富士山登りへの考え方方が相当甘かったと感じた。普通の山登りの格好をし、靴も普通の運動靴で挑んだが、ほかの人々は色々な装備を揃えて、本格的な登山用の格好でいることを分かった。不安の中、唯一の希望は無理矢理に 6L ぐらいの水を持ってきたことくらいだった。

歩いて 5 時間後、姉が「頭が痛い」と言って、高山病の症状を見せた。親は凄く心配し、“また今度でも大丈夫だからもう降りて、次万端の準備をしてまた挑戦しよう”と言った。しかし、姉はここまで来て、また 4 人でこう富士山登りができるチャンスは中々来ないと言いながら、そのまま登りを強行した。また、2 時間後は母が、そしてまたしばらく経ってからは父が高山病の症状で苦しんでいた。ほぼ 6 時間以上の距離だったので、皆どうしても頂上までは行きたい、ここまで来て諦めるわけにはいかない気持ちで、少しずつ休みながら前へと足を運んだ。幸いに、高い高度である程度適応したら高山病の症状もなくなるようで、姉も母も父も登り 8 時間目からはすっかりと元気になった。

しかし、あいにく、今回は自分の体に異変を感じた。姉から始め、父まで高山病で苦しんでいる間、自分は水もちゃんと取れず、6L の水をもってしかも 3 人分の荷物も一緒に運んで

いたせいか、脱水症状と高山病の症状が一緒訪ねてきた。“もうあと 1 時間で頂上なのに諦められない”と意地を張った私は地獄のような 1 時間を味わったがそのまま登り強行。

そうやってようやく頂上の土を踏んだ瞬間は、高山病のこともすっかり忘れて、日登の富士山の光景を見ながらふと頭の中に浮かんだ記憶があった。“初めての飛行機に乗って見た光景がここだな”と思った瞬間、なぜか私は富士山の頂上に来る運命だったんだと思うことになった。“この素晴らしい光景を見せるために富士山が 8 年後の私を呼んだかな”と思うくらい、世の中のモノではなさそうな風景が目に入ってきた。後で分かったのは、富士山に登れる時期は決まっていて、しかも天気が良くない日には頂上にもいけず、しかも頂上に行っても日登が見られる良い天気は月に 1~2 回だけだと言われた時、なおさら富士山登りは自分の宿命だったんだと思うことになった。しかしながら、残念なことに、山は登って終わりではなく、また 6 時間降りることが残っていた。再びしんどい経験をした私は富士山を降りながらはっきりと分かった。“富士山の頂上との出会いは一回だけの運命だ”と。

